



大草原に 還る日

王興東 王浙濱

WANG XING DONG

WANG ZHE BIN

李珍 [訳]

LI ZHEN



大草原に還る日

1997年9月20日 第1刷発行

著者——王興東／王浙濱〈検印廃止〉

訳者——李 珍

発行者——安藤龍男

発行所——日本放送出版協会

〒150-81 東京都渋谷区宇田川町 41-1

電話 03(3780)3301〔編集〕03(3780)3339〔営業〕

振替 00110-1-49701

装丁——菊地信義

印刷——啓文堂／近代美術

製本——笠原製本

Japanese Edition Copyright ©1997 Li Zhen Printed in Japan

〔R〕〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の無断複写(コピー)は、
著作権法で認められた場合を除き、
著作権侵害になります。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-14-085006-X C1397

大草原に還る日

王興東・王浙濱〔著〕
李珍〔訳〕

NHK出版

Copyright© 1992 Wang Xing Dong & Wang Zhe Bin
原題：『電視劇本 離別廣島的日子』，中国北方
婦女兒童出版社（1992）発行

日本語版に寄せて

中国内蒙古のクルンに一人の平凡な女性教師がいた。烏雲という名と共に立花珠美という日本名を持つ彼女は、クルンの地で四十余年を過ごし、その間多くの学生たちを教え育ててきた。私たちはこの烏雲や、彼女と同じ運命を辿った多くの日本人戦争孤児への取材を通して、半世紀前のあの日中戦争は中国人に恥辱と災いをもたらしたばかりでなく、日本人にも深い傷を残したのだということを痛感した。しかし人民に罪はない。中日両国の人民の友情はとこしえである。これは私たちがこの長編小説を構想する際に、繰り返し思い巡らせた歴史的テーマである。

ドラマでは多くの日本人戦争孤児が辿った真実の運命を高娃という人物像に凝縮させた。日本の地で生まれ、中国の地で育まれた彼女は、また教師として、中国の地で成長した子供たちを一代また一代と育んできた。彼女はこのドラマの全編を通じて最も曲折した運命を辿り、誰よりも複雑な心情を持ち、最も劇的な女性である。ドラマでは彼女と二人の中国人養母との関係を設定しているが、それは中国人が彼女の体の傷を治したばかりでなく、戦争被害者の心の傷も癒し、彼女の生命の中の感情世界を繕い、優しく包み込んで護ったということ而努力して表現したかったからである。

生命とは息づく感情そのものである。人間は国籍、人種、血縁を問わず平和な生存環境を求めている。そのためにもすべての人々に友情と愛を呼びかけていくことが必要である。

高娃と彼女の夫や友人や学生との関係を設定したのは、彼女の生命と中国の大地とのつながりを強調するためである。一個の人間はあたかも一粒の種子のようなものである。大地に根を下ろし、陽光と雨露を享受し、風雪に耐えながら育ち、花を咲かせ、実を結ぶ。そして最後に彼女を培った大地に落ちて還ってゆく。生命はまさにこのように輪廻するものだ。また生命であるからこそこうした素晴らしい力を具えているのだ。

中日国交二十周年という佳節に、両国民にこうした贈り物ができることは、私たちにとって喜びであり慰めである。

一九九二年九月

王興東

王浙濱

民族を越えた愛とロマン

山崎豊子

『大草原に還る日』は、日本の戦争孤児の数奇な運命を、中国側から描いた小説である。物語の舞台である内蒙古の草原は、私にとって胸が揺ぶられるほど懐しい。大空に浮かぶ綿のような雲、緑の大草原、遊牧民が追う何百頭もの羊の群れ、黄金の輝やきを放ちながら、地平線へ沈んで行く巨大な太陽——、曾て『大地の子』の取材で、中国に滞在していた時、内蒙古自治区へも訪れ、包^{バオ}で過した体験を持つからである。

八才の日本人少女が、逃避行で孤児になり、最初は漢民族の養父母に、次いで蒙古族の養父母に育てられ、成長していく過程で、主人公は三つの名前を持つ女性になる。一つは日本名・竹田繁子、次いで漢民族の養父母につけられた崔蕎蕎、三つ目は蒙古族の養父母につけられた高娃である。漢民族、蒙古族によってその名前が異なる点は、いかにも多民族国家の中国ならではの特異性である。しかし懐^{ふところ}の大きさには、漢民族も蒙古族も変りない。戦争孤児に対する慈愛の深さには、頭が下る。また、彼女を取り巻く二人の少年が、歳月を経ていくうちに、愛を抱くようになるのも、民族の違いを越えた愛とロマンに満ちている。

この小説で最も感動的なのは、蒙古族の名前になった高娃の生き方である。養父母に師

範学校まで出して貰った高娃は、自分を育んでくれた大地の人々に報いたい、草原の子どもたちに勉強を教えたいという理想に燃えて、辺境の草原に赴任を志願し、小学校の校舎づくりから取り組み、僅か五名の生徒の教師として教壇にたつ。

或る日、白毛風（暴風雪）が草原を襲い、生徒たちは包の中に閉じ込められてしまつて、凍死の危機にさらされるが、高娃は教科書まで火にくべさせ、眠らないよう励まし続け、全員の命を守った。救援隊が到着し、子供たちの無事を知ると、「日本人・竹田繁子はどう我々の草原の人間だ、草原に生命を捧げた素晴らしい教師だ」と、はじめて名実ともに蒙古族として受け入れ、尊敬するようになる。

一方、日本の兄は、妹の繁子を探し出すことに力を尽し、ようやく探し当てると、日本へ里帰りを実現させる。竹田繁子こと高娃は、三十六年間、自分を育んでくれた養父母に、白い哈鞆（絹の長い布）を捧げて恩愛を謝し、生徒ともども日本への門出を祝う盃を交して、大草原を去って行く。壮大な蒙古の風景と蒙古独特の儀式が絵のように美しく、ドラマを盛り上げている。

せっかく帰った豊かな祖国であつたが、彼女にはなすべきことがなく、空疎な日々が経つうち、日本は私を必要としない、しかし、中国では私の生徒たちがいると思ひ至るや、高娃は決然と日本を去り、内蒙古へ戻る。

私は『大地の子』で、主人公が日本の父親と巡り合い、逃避行で全滅した家族の位牌を

守って、一人住いをしてゐる孤独な姿を見、心千々に乱れるが、最後に「私は大地の子です」と、中国に留まる最終章を書いた。それだけに、この小説に共感するところは随所にある。

日中国交回復二十五周年を迎えたが、その歴史の中で、大人たちの罪業を背負って生きて来た戦争孤児の存在は大きい。私はそのことを、この『大草原に還る日』を通して、多くの人には是非、知ってほしいと願う。

作家

目次

日本語版に寄せて 王興東／王浙濱
民族を越えた愛とロマン 山崎豊子

3
5

序

13

第一章 引き裂かれた家族

14

第二章 養母の温もり

45

第三章 新たな運命

78

第四章 豆腐売り

105

第五章 「尋ね人」

131

第六章 大草原の教師

162

第七章 モルゲンの誕生

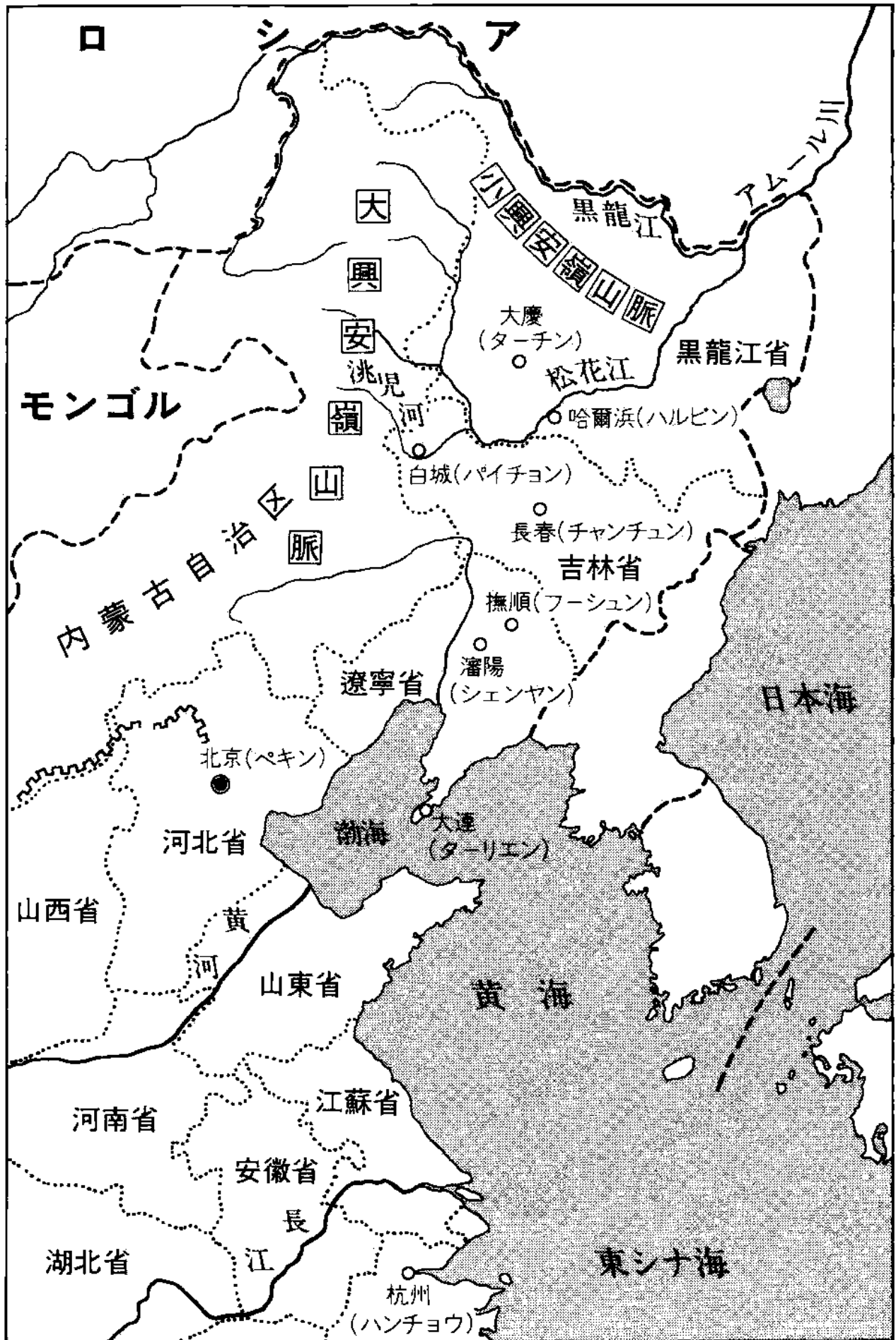
192

第八章 「文革」の嵐

217

第九章	広島 の 兄 から の手紙	255
第十章	日本帰国へ	288
第十一章	四十二年ぶりの祖国	322
第十二章	大草原に還る日	349
訳者あとがき	李 珍	375

大草原に還る日



序

一枚の黄ばんだ記念写真がある。裏書に「竹田一郎家族 昭和十五年 広島厳島神社にて」とある。鳥居の前で一家六人が神妙な顔で写っている。真ん中の軍服姿が竹田一郎。一郎の横に座っている和服姿が妻の美恵子。その腕に抱かれているのが生まれたばかりの義男。その後ろが叔母夫婦。右端の女学生が長女の鶴子、左端の坊主頭が長男の秀男。そして秀男に手を引かれたおかつば頭の女の子が、この物語の主人公、繁子である。

竹田一郎は満州政府の文官試験に合格し、秀男だけを祖父母の元に残して、妻子と共に満州（現中国東北部）北西の興安南省（現内蒙古自治区）に赴任することになった。この写真には竹田家が満州に移り住む前に撮った郷里での記念写真である。

竹田一家が渡満した昭和十五年（一九四〇年）といえば、前年の第二次世界大戦の勃発、ソ満国境をめぐる武力衝突など、日本が滅亡への道を確実に歩み始めていくころである。竹田繁子は当時まだ三歳であった。彼女たちの渡満後、日本は太平洋戦争に突入し、戦火は一挙にアジア全域に拡大したが、幼い彼女は中国の辺境の地にあつて、戦争の何たるかを知ることもなく五年間を過ごした。しかし戦争という悪魔は幼い繁子にも容赦なく襲いかかり、その人生に癒えることのない深い傷を負わせるべく、狂暴な牙を研いでいた。

第一章 引き裂かれた家族

昭和二十年（一九四五年）八月十一日、満州国興安駅こうあん――

第二次大戦で日本の敗色が濃厚となり、さらにソ連軍が参戦するに及んで、中国満州に展開していた関東軍及び日本人居留民は南方への撤退を余儀なくされた。

ここ興安駅でも、迫りくるソ連軍から逃れるため、大勢の日本人が駅に殺到していた。プラットホームは南へ向かう列車に乗り損ねまいとする兵隊や民間人で溢れ返っていた。列車が到着すると、群衆は我先にデッキに押し寄せた。しかし汽車はすでに人が溢れ出るほどの寿司詰め状態で、ある者は仕方なく窓からねじ込むように乗り込み、ある者は屋根に攀じ登った。けたたましく鳴り続ける汽車の警笛が、群衆の焦りをさらに煽った。先に乗った人を引きずり下ろす者、それを蹴り落とす者、雑踏に押し倒されて踏みつけられる子供。男たちの罵声ばせいと怒号、女や子供の悲鳴が交錯し、プラットホームはまさに修羅場と化していた。

竹田繁子（八歳）は弟義男の手を握り、もう一方の手は母親美恵子の服をしっかりとつかんでいた。母親の胸には現地で生まれたばかりの春子が抱かれていた。父親の竹田一郎

は窓から車内に潜り込んだ。その時、眼鏡がホームに落ちた。繁子がそれを拾い上げたが、父に渡すどころではない。母親が群衆に揉まれながら赤ん坊の春子を押上げて父親に渡す。父親はそれを車内に引き入れると、繁子や姉の鶴子を引き上げようとまた身乗り出した。とその時、

「空襲！ 空襲！ 敵機来襲！」

と叫ぶ将校の声がするや、ソ連軍の飛行機が急降下してきた。ホームの群衆は一斉に身を伏せた。美恵子も繁子と鶴子を押し倒しながらホームに身をかがめた。ドローンと二発の爆弾が線路際で炸裂し、硝煙が駅構内に濛々とたち込めた。汽車の屋根に据えられた機銃が空へ向かってやみくもに反撃したが、敵機はそれを嘲笑うかのように上空を旋回して北へ飛び去った。繁子たちは硝煙にむせびながら顔を上げた。見ると、列車が車輪を軋ませながら動き始めている。ホームの人々は取り残されまいとその後を追ひ、窓にしがみつこうとしたが、むなしく振り落とされた。繁子も父の名を叫び父親の眼鏡を高く振りながら列車の後を追いかけた。だが、父と妹を乗せた汽車はどんどん加速していく。車窓から身乗り出していた父も、家族の名を呼ぶばかりでどうすることもできなかった。やがて列車は遠く去り、駅には千人以上の日本人が取り残された。しかし悲嘆に暮れてばかりはいられない。歩いてでも南へ逃げなければならなかった。

関東軍は避難民を大隊、小隊、分隊に組織し、六百キロ南の奉天（現瀋陽）を目指して